

天台密教の充実と比叡山の興隆に努め、特に園城寺の再興に寄与した僧に円珍がいま

す。

円珍は、弘仁5年(814)に讃岐国那珂郡、現在の香川県善通寺市に生まれ、俗名は和氣広雄、母は佐伯氏の娘で、弘法大師空海の姪にあたります。10歳で『毛詩』『論語』『漢書』『文選』を習うなど、幼少から秀才を発揮し、15歳で比叡山延暦寺に登り、初代の天台座主義真の弟子となりました。

19歳の時には、年分度者(僧侶になるための国家試験の合格者)の試験に合格して得度(円珍と改名)、翌年には菩薩戒を受け、比叡山の掟に従い「十二年籠山行」(12年間比叡山から下りずひたすら修行すること)に入りました。この12年の籠山修行を終えた後も大峯山や熊野三山を巡り、厳しい修行を行いました。承和13年(846)、32歳で一山大衆に推されて真言学頭となり、円珍の地位は次第に確立し、嘉祥3年(855)

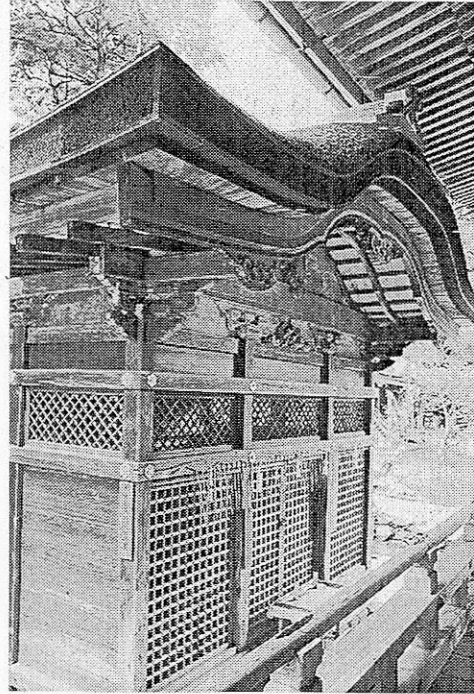
0)には伝燈大法師の位をうけました。同年、円珍は入唐求法を請願し、仁寿3年(853)、唐へ留学し、6年を経て天安2年(858)に多くの經典・凶像・法具を携えて帰国しました。貞観元年(859)には、園城寺(通称三井寺)に「唐院」を置き、持ち帰った經典などを収蔵し、寺を整備して門弟の修行の道場としました。なお、在唐中には日本からの留学生のために天台山国清寺に天台日本国大徳僧院を建てています。

園城寺は、7世紀に大友氏の氏寺として創建されたと伝えられており、金堂付近の下層から白鳳時代の軒丸瓦などが出土します。天武天皇から「園城」という勅額を賜ったことが園城寺の始まりとされています。三井寺と呼ばれるようになったのは、天智・天武・持統天皇の三帝の誕生の際に御産湯に用いられたという霊泉があり、「御井の寺」と呼ばれていたものを後に円珍が当時の嚴義・三部灌頂の

法儀に用いたこと由来します。現在、金堂西側にある「閼伽井屋」から湧き出ている清水がこの御井そのものとされています。

園城寺と智証大師円珍

三井寺と呼ばれるもとなった清水が湧く園城寺の閼伽井屋



貞観8年(866)には、太政官から円珍に伝法の公驗(僧侶の証明書)が与えられ、円・密・禪・戒の四宗に併せて修験の一道を加える天台寺門の教法が正式に認められました。そして、貞観10年(868)には天台宗最高の地位である天台座主に就任

し、以後亡くなるまでの24年間その地位にありました。当時、藤原良房・基経父子が政権を握っていましたが、彼らは円珍を手厚く優遇しており、円仁・円珍によって隆盛した天台密教は、ますます貴族政権との密着を強めていきました。

貞観14年(872)、比叡山に帰った円珍は、朝廷の招請以外は辞退し、門弟の育成と山内経営に専念しました。元慶5年(881)に『延暦

寺元初祖師行業記』を、同8年には『比叡大師略伝』を著し、最澄の業績を通して比叡山の立場を明らかにしました。また、最澄が建立した根本薬師堂・文殊堂・経蔵の三堂を一つの堂として改造し、根本中堂を完成させてもいます。

その後、寛平3年(891)、78歳で亡くなり、延長5年(927)に醍醐天皇から「智証大師」の諡号が贈られました。

このように、円仁とともに天台宗の教の礎を築き、比叡山興隆の基礎を確立した円珍でしたが、円珍の死後、比叡山は円珍門派と円仁門派との2派に分かれ、事あるごとに対立するようになりました。正暦4年(993)には、円珍派の僧坊が円仁派によって焼き討ちされる事件が発生し、これをきっかけに、円珍派の僧侶たちは比叡山を下り、園城寺に拠点を移すことになりました。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 吉田秀則)

門弟の修行道場として整備